

## ● 四 国

## 岸 啓 子

コロナ籠りからwithコロナへの移行とともに四国の音楽活動にも活気が戻ってきた。

大きなイベントとしては第5回高松国際ピアノコンクールがあり、ロシアのフィリップ・リノフが優勝し、西本裕矢が香川県出身として初めて4位に入賞して話題となった。本選オケを務めた瀬戸フィルハーモニー交響楽団は、定期演奏会にフィリップ・リノフを迎えてプロコフィエフのピアノ協奏曲を披露し(第39回 指揮：大友直人)、高松交響楽団は西本裕矢をソリストにラフマニノフのピアノ協奏曲第2番を第129回定演(指揮：上野正博 11月)と観音寺特別公演(同)で演奏した。

四国唯一のプロオケである瀬戸フィルは、第38回定期演奏会(指揮：三ツ橋敬子 fl: 上野由恵)、SDGsを学ぶ「ぼくのわたしのSDGsコンサート」(教育委員会への協力 7月)、イオンモールでの連続コンサート、シンガーソングライター漆とのコラボライブ、毎年恒例の「かがわ第九」(指揮：中島良史9月)への初登場等々地域の音楽の中核として活躍している。

高松交響楽団は、第128回定期(指揮：山上純司 6月)、アーツフェスタたかまつ〜わたしの街のソリスト達(6月)、かがわジュニア・フィルへの協力(8月)、高松市美術館でのクリスマスコンサート(12月)、トヨタカローラショップでの室内楽等多彩な活動を展開した。丸亀市恒例の「まるがめ第9演奏会」(指揮：松下京介 丸亀シティフィル12月)、「ベートーヴェン巨匠への歩み」(音楽監督・指揮 大山晃 7月)も関心を集めた。高知交響楽団は年3回の変則開催となった定演で、ロマン派の名曲を並べた意欲的なプログラムを組み、変わらぬパワーと心意気を示した(第169~171回指揮：平川範幸1月、石毛保彦6月、平川範幸11月)。高知県文化賞を受賞した四国フィルも意気軒昂である。徳島交響楽団は2度の演奏会(ニューイヤー 指揮：山田啓明 pf: 秋元孝介 藍住町1月)(第52回定期 指揮：中田延亮 vn: 荒井里桜 10月)のほか、鳴門市板東俘虜収容所における「第九」アジア全曲初演を記念して毎年実施されてきた第九演奏会の4年ぶりの再開をサポートした(指揮：山田啓明 4月)。愛媛交響楽団も健在である(第51回定期 指揮：大浦智弘 tp: 伊藤駿12月他)。

声楽関連では、四国二期会(香川)が自粛期の流れを汲む「オペラ・ガラ・スクリムコンサートⅡ」(2月)の後、4年ぶりに制約なしのオペラ公演『カヴァレリア・ルスティカーナ』(指揮：守山俊吾 演出：十川稔 トゥリッドゥ：若井健司 瀬戸フィル 第48回10月)を行い、オペラ徳島は7年ぶりの公演『こうもり』で満員の聴衆を沸かせた(指揮：山上純司 演出：松本憲治 ロザリンデ：乗松恵美他 25周年記念12月)。さわかみオペラin徳島『椿姫』には地元合唱団コーロ・インダコも出演した(11月)。愛媛ではオペラえひめ定演が漸く実現し(「オペラ名場面Anthologyアンソロジー」第14回2月)、四国二期会愛媛も公演(第39回11月)を实らせた。また歌劇『天空の町〜別子銅山と伊庭貞剛〜』(新居浜10月)の再演、日露音楽文化サークルの「ヒメオベ」コンサート(11月)もあった。高知では牧野富太郎博士を題材とした新作ミュージカル『Gift of

Life 〜にぎやかな植物園〜』(高知市民ミュージカル第7回12月)が話題を集め、同じく異色の新作ミュージカル『空海〜HERO〜』(10月)も吟詠、山田太鼓等を用いて上演された。

コレgium・ムジクム高松(主宰・指揮：大山晃 協力：高松交響楽団 第27回4月)と高知パッハカンタータフェライン(主宰・指揮・バス：小原浄二 第26回3月)は、パッハと併せて古典派作曲家にも挑戦し、新展開を探る年となった。高松国際古楽祭(芸術監督：柴田俊幸 志度、第6回小豆島等9~10月)は企画構成・演奏ともに絶妙で、四国の貴重な音楽祭として評価を固めている。